

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2 ミュージアムの収蔵品60
『アウシュヴィッツで殺害された子どもの靴』

巻頭
つれづれ

3 第8回国際平和博物館会議@韓国ノグンリ
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5 芸術・文化・科学で表す感性と理性の融合が持つ意味
—立命館大学国際平和ミュージアムと設立予定の附属研究所の使命についての考察
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐〕

ここが
見どころ

7 国際平和ミュージアム初代館長加藤周一と「小さい花」
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

運営委員
リレー連載

8 平和構築の現場から
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
東 佳史〔立命館大学政策科学部教授〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

10 石川明人 著
『戦争は人間的な営みである—戦争文化試論』(並木書房 2012年刊)
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
金丸 裕一〔立命館大学経済学部教授〕

ミニ企画展

11 開催報告 (2014年6月~8月)

事業報告

- 特別企画展示 石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」
 - 2014年度 博物館実習受け入れ
 - 立命館土曜講座 (2014年8月)「若い世代に語り継ぐ戦争と平和—学徒出陣70年から、戦後70年を見すえて」
 - 小中学校教員下見見学会2014
 - ボランティアガイド学習交流会
 - 茨木市非核平和展
 - 第8回国際平和博物館会議 参加報告
- 世界の平和博物館の紹介 イランのテヘラン平和博物館
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕
 - ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 松田 愛子
 - 2014年度入館者状況 (2014年4月~10月)、編集後記
 - ミュージアムインフォメーション



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE



立命館大学
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『アウシュヴィッツで殺害された子どもの靴』



1940年-1945年 縦18cm×横8cm×高さ4.5cm



靴の裏面（ラベルは戦後つけられたもの）

シャフト（足首から上）部分が折り曲がってつぶれていますが、この資料は皮製の編み上げショートブーツです。70年以上の歳月による経年変化で、縮んでいる筈ですが、それでも大きさから、子ども用であることがわかります。表には大きな破れや擦り切れもなく、足囲の折り曲げによる変形やしわもさほどありませんが、裏面にはかかとやつま先などに補修が施されており、ある程度はき込まれていたものと思われる。

この靴をはいていた子どもの名前も、生まれた年や場所も、どのような人生を歩んだのかも、わかりません。ただ、この資料がアウシュヴィッツに残されたという状況から、持ち主はここで命を落としたことがわかります。

アウシュヴィッツは、ナチスドイツが作った強制労働と殺害のための収容所でした。1940年から45年の間に、約130万人がアウシュヴィッツに送られ、約110万人が殺害されたと見られています。ヨーロッパ中から貨車で運ばれてきた囚人の大部分は、到着と同時に強制労働とそうでない者に振り分けられました。労働に選別された人々も過酷な労働、劣悪な食料や衛生状態、暴力によりほぼ数ヶ月で死んでいきました。子どもや壮健でなく労働に向かない人々の大部分は、そのままガス室へ送られて殺害されました。

ナチスは、ユダヤ人やシンティ・ロマ（いわゆるジプシー）、同性愛者など、「劣等」とみなした人々をこのように迫害しました。

ユダヤ人に対する絶滅政策は過酷であり、占領地を拓げる度にユダヤ人を探して殺害し、占領地域から文字通りユダヤ人を一掃することが目的とされていました。収

容所へ送らず、侵攻したその場で処刑する例も多数ありました。

このような大規模な迫害の背景には、ヨーロッパに根深いユダヤの人々への差別意識がありますが、迫害の実行は法律や政策として段階的にくみ上げられたものでした。1933年、ナチスは政権を取ると、ユダヤ人に対する人種主義政策を進展させ、公職からの追放やアーリア人とユダヤ人の結婚の禁止を法的に決めました。これ以降、ユダヤ人は職業の制限、強制隔離など段階的に迫害され、長年その地域に住み、学び、働き、生活していた基盤を一つ一つ奪われ、最後は隔離されたゲットーから強制収容所へ送られました。彼らを匿ったり、援助した人や政治犯も強制収容所へ送りました。この靴はそうした歴史の中に残された資料です。持ち主は家族と共に直接アウシュヴィッツに送られてきたか、すでに家族から引き離されてチェコのテレジンシュタットなど子どもを収容する施設から送られてきたのかもしれませんが、ただ、労働に適さないため、到着したプラットホームでの選別の後に、鉄条網で囲まれた道を追いたてられ、ガス室で殺害されたと推測できるのみです。到着後、個人の所持品はすべて奪われ、作業を課せられた囚人により物ごとに分別されて資源として倉庫に保管されました。アウシュヴィッツには現在もこうした過程で残されたかばん、服、眼鏡、靴などの山が残され歴史を伝えるために展示されています。

1945年1月、ソ連軍はポーランドの古都クラクフ近郊にあるアウシュヴィッツに到達し、瀕死の状態の囚人約7,000人を解放しましたが、ナチスによる迫害で600万人に近いユダヤ人が命を奪われました。そのうち150万人は子どもでした。

アウシュヴィッツ解放から70年にあたる2015年1月、この資料はミニ企画展示「ミュージアム・この1てん」として展示されます。

（学芸員 兼清順子）



アウシュヴィッツのガス室へ続く道

第8回国際平和博物館会議@韓国ノグンリ

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安斎育郎

(立命館大学名誉教授)

3年間の準備後、盛会裏に開催

世界の平和博物館の連携を進めるために、1992年からほぼ3年に1度のペースで開催されてきた「国際平和博物館会議」。これまで1998年と2008年の二回は日本で開催されましたが、国際平和ミュージアムも、ピースおおさか、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館、沖縄平和祈念資料館、京都造形芸術大学、立命館アジア太平洋大学などと協力して重要な役割を担いました。

そして、今年9月19日～22日、日本以外のアジアの国としては初めて、韓国のノグンリ平和公園（1950年7月、朝鮮戦争中に米軍による韓国人大量虐殺事件があった忠清北道永同郡の山里にあり、平和博物館や関連施設がある）で「第8回平和博物館会議」が開催され、主催者発表で「35か国から175人以上の参加」がありました。40%弱が日本からの参加者だったことは、日本の平和博物館関係者の旺盛な意欲と豊かな実践の反映でしょうし、当館副館長の山根和代さんや「平和友の会」の谷川佳子さんの協力を得て、昨年来、積極的に参加を呼びかけてきた成果とも言えるでしょう。「平和のための博物館国際ネットワーク (INMP)」統括コーディネータのピーター・ヴァン・デン・デュンゲンさんからは、「ときどき、まるで日本にいるような気分になった」というメールが届きました。日本からは、平和博物館の運営関係者に加えて、平和活動に取り組む市民、平和研究や平和教育分野の専門家など、多様な人々が参加していたことも特徴でした。

準備責任者であるノグンリ国際平和財団のチャン・クドー理事長の熱意を反映して、会議は開会行事から超盛りだくさんで時間不足に陥りがちでしたが、初日の全行事終了後の会場の一角で、チャン理事長を中心に運営のあり方についての総括会議を開き、軌道修正について意思統一を図っている姿が印象的でした。

なお、国際会議の前日、同じ会場でノグンリ国際平和財団の「第7回平和賞」授与式が行われましたが、日本発の「平和首長会議」(Mayors for Peace) の

活動が高く評価され、事務局を担当する公益財団法人・広島平和文化センターの小溝泰義理事長が受賞されました。2年前にはINMPが第5回平和賞を受賞しており、当館の山根副館長が代表して受賞演説を行いました。(ちなみに、私自身は第4回平和賞の受賞者です)

満足度が高かったポスター・セッション

9月19日の初日の全行事日程が終わった21時過ぎから、10人以上の日本の参加者が翌日午前中のポスター・セッションや展示会の準備作業に取りかかりました。会場からホテルまではバスで40分程もありましたから、その日の内に就寝して翌日に備えるため、どうしても時間との競争になりました。最終バスは23時発。皆、遅くまで頑張りました。

翌20日午前中、ポスター・セッションの会場には海外からの参加者多数が訪れ、関心のあるポスターの前で発表者と双方向の意見交換を行いました。日本の平和博物館関係者の多くは、このような国際会議でのポスター発表に習熟していませんでしたが、多くの方々が果敢に応募し、当日懸命に発表して頂いたことに敬意を表したいと思います。ポスター会場での意見交換には立命館の留学生も含めて通訳の役割を果たして頂きました。

ポスター会場では、当ミュージアムに関連する発表が2つありました。いずれも「平和友の会」の関係者ですが、一つは、伊藤昭さんによる「立命館大学国際平和ミュージアムは、市民運動と私立大学のコラボレーションで誕生」、二つめは、片山一美さんによる「国際平和ミュージアム『平和友の会』について」です。これらの発表は、当館学芸員である兼清順子さんの分科会発表「2010年代の立命館大学国際平和ミュージアムの活動—大学立の平和博物館としての役割」ともども、国際平和ミュージアムの成立や活動、市民との共同の全体像を知る上で大変貴重なものでした。「これらの発表をもとに平和ミュージアムの全容を理解するための本が一冊作れますねえ」—伊藤昭さんと、そ

んなことも話しました。

国際会議や学会では、いわば「場を占有」できる「口頭発表」も重要ですが、関心のある人との双方向の意見交換を行うことのできる「ポスター発表」も固有の大切な意味をもつことはもっと認識されて良いでしょう。



ポスター・セッションでオランダやコスタリカからの参加者と意見交換する「平和友の会」の谷川佳子さん

空から見た御嶽山の姿に触発されて

第8回国際平和博物館会議のテーマは「記憶、歴史的真実、和解を促進する際の平和のための博物館の役割」でしたが、それには、今年が第一次世界大戦勃発（1914年）から100年目に当たることもさることながら、何より、ノグンリが朝鮮戦争さなかに起きた非戦闘員に対する無差別殺戮事件の現場に他ならず、国際会議の会場となったノグンリ平和公園が、その事件の記憶と真実解明と和解の過程で成立したという事情が反映されています。

準備に当たったノグンリ国際平和財団のチャン・クドー理事長は、最終日の9月22日、いまだ「終戦」ではなく「休戦」状態にある南北朝鮮分断の象徴ともいえるべき非武装地帯にバス4時間をかけて私たちをいざない、「平和宣言」を発表しました。同宣言には、「敵意と対決の場」を「平和の場」に変えるために、非武装地帯に平和公園をつくり、そこに平和博物館を建設したいという将来構想も盛り込まれました。

帰国後まもなく、私は、「JCO臨界事故を忘れない、原子力事故を繰り返させない2014年9・30茨城集会」の講演に臨みました。翌日から3日間は福島での放射能調査が予定されていました。この「茨城集会」は、15年前の1999年9月30日、東海村の核燃料製造会社

で起きた臨界事故で2人の労働者が亡くなったことを「記憶」し続けるための茨城県民の主体的努力であり、こうした「忘れない」「風化させない」努力はとても大切です。

10月16日、私は再び放射能調査のため、伊丹空港から福島空港へ飛びました。飛行機から、噴気を上げる御嶽山（写真参照）が見えましたが、もちろん、山頂付近で起きている戦後最大の山岳災害の様子は見えません。ちょうど、米軍機が写した広島原爆のキノコ雲の写真を見ても、キノコ雲の下の惨状が何も分からないのと同じです。

確かに、私たちは、戦争の大局をバース・アイ・ビュー（bird's eye view、鳥瞰図）として俯瞰することは必要ですが、噴気の下、キノコ雲の下の地上に降り立ち、人の命が見える視点からインセクト・アイ・ビュー（insect's eye view、虫瞰図）として現実をとらえることが不可欠だと思います。少なくとも私は、戦争についても原発災害についても、個別の事実を無視して大局だけを論じるような科学者ではありたくないと強く感じますし、それは、平和博物館についても同じだと思います。

いま、第8回国際平和博物館会議のテーマ「記憶、歴史的真実、和解を促進する際の平和のための博物館の役割」を思い起こすにつけ、平和博物館は、戦争などの暴力の記憶や真実を一つ一つ掘り起こす努力を積み上げ、和解の促進のために貢献したいものだ、そう感じています。



空から見た噴気を上げる御嶽山
(2014年10月16日、撮影：安齋育郎)

芸術・文化・科学で表す感性と理性の融合が持つ意味 —立命館大学国際平和ミュージアムと設立予定の附属研究所の使命についての考察

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐)

先日のテレビ番組でアメリカのカリフォルニア工科大学（CalTech）のジェット推進力研究を行っている研究所、Jet Propulsion Laboratory（JPL）のロボットによる宇宙探検への貢献を見て、科学技術力と言えば迫力があるものだと思われられた。それに比べて、芸術文化力はもっとソフトで時によって弱々しく見える場合もある。だがその力を軽く見てはならない。先月（2014年11月10日）この世を去ってしまった映画俳優・高倉健の人生の歩みを見ると、その無口の男像、深く物事を語る背中、この東洋的とよく言われる姿は彼を中国の英雄にした。1966年から1977年に渡った「文化大革命」の混乱を脱け出した時代に、初めての日本映画として上映された「君よ憤怒の河を渉れ」で高倉さんは強く中国の国民の心に刻まれた。私の母国スリランカでも30年近く国を分裂させような内戦を、その始まりの十年以上前に予言した劇作家がいた。ヘンリー・ジャヤセーナ氏¹が、旧ソ連からの帰り道で、日本を訪ねたとき東京で会った時のことを思い出す。「あなたのような作家に、言論の自由の無い社会で印象付けられたことがありましたか？」と聞いた私に「社会的制約が厳しいからこそ、意味のある芝居は出てくる」と答えてくれた。考えて見れば旧ソ連邦のスターリン政権時、独裁的支配とされていた時代でさえ社会的批判をしていたミハイル・ブルガコフ²の芝居に、スターリンが持っていた憧れを思い出した。

当時のスリランカでは言論の自由があった。私が日本に1972年来るまでの4年間、スリランカ大学ロンボキャンパスに隣接した産業博覧会の跡地で、空き家になっていた映画館をボランティアで建築学科の仲間と復元し、そこで大学の学生自治会が文化度の高いアジア映画を毎週上映していたことを思い出した。多数派のシンハラ民族から誕生したゲリラ軍JVP（ジャーティカ・ビムクutti・ペラムナ）³の活動開始の時期だった。庶民向けで1ルピー（当時0.16米ドル）払えば、早いもの順で席を選び楽しめる上映会はいつも人でいっぱいだった。その映画の周りに作家や芸術家、音楽活動をやっている方々が集まり、彼らの作品の販売、解説、サイン会など、市民による熱烈な評論、論議等が行なわれたことを思い出す。言論は自由な民主主義の象徴の場とも言えた。だがこの活動が

始まって十年も足らずの内にゲリラ活動は深刻になり、少数のタミール民族の未達成の期待を代弁していると言っていたゲリラの武装グループが複数誕生する。この転換期の中で、市民映画館が閉鎖され、自由な公開討論ができなくなった。

スリランカの西南海岸にアンバラゴダという町がある。昔から仮面づくりで有名な町で人形劇も盛んな地域だった。1980年代に訪問すると、仮面職人は見つかったが、人形劇が消えていた。どうなったかと聞くと、彼らは内陸の遠い田舎で活動を続けていることが分かり、彼らを探しに行った。見事な芸人の腕を見せた山奥の小学校のグラウンドで、彼らに話しかけた。やっぱりその時の社会環境が許さなくなっていた体制側の批判で、歴代人を笑わせて慰めていた人形劇は、警察の目が届かない山奥の貧しい村の学校の教師や生徒の父母会で支えられ続けられていた。田舎の小さな学校であったが、言論の自由を大切にしていた感じがした。心に訴える力がある芸術文化の力と向かい合った時だった。



アンバラゴダの伝統的な人形劇で使われる仮面
©DTACスリランカ観光情報局

その芸術文化力を社会に伝える「場」として美術館や博物館があるが、公の資金に頼ることで中立に見えても体制側の力学で左右されやすい面もある。そのことに気付くと社会構造の中で、正当な討論ができる空間を守る大切さが見えて来る。戦後日本における大学自治の尊重は重要な社会的基盤であり、その保証役を果たしている。世界で初めての大学立の平和博物館である「立命館大学国際平和ミュージアム」の使命もそこにあると言える。最近のことであまり社会的に重要

とっていない方々もいるかも知れないが、京都大学の敷地内に警察官が立ち入った報道記事を見て、大事な起点だと思った。大学自治は言論の自由を保障し、それはまた民衆の多様な意見を聴取する場であることを我々は忘れてはならぬと思った。2002年にアメリカのカリフォルニア大学サンディエゴ校を訪ねたとき、パレスチナの日常生活の辛さを描く芝居を図書館前の道端で行っているのを見て感動した覚えがある。どちらへ向かって道が急に閉鎖され、家に帰れなくなった母親の焦りを生々しく伝える、パレスチナ難民のための募金活動に関連してのものだった。

芸術文化力の感性豊かな表現を力づける理性の討論も大事である。我が国際平和ミュージアムの20周年記念に打ち出した第3ステージプランで、ミュージアム附属「平和研究所」の設置を描いている。設立準備に今、関わっていて来年度の開設をめざしている。ミュージアムの感性豊かな表現と理性の下、平和を支える社会的構造が変わり、失う危機の時の変革の要因を科学的に分析し明らかにするような研究が重要と言える。歴史と誠実に向き合うことのためには不可欠である。社会的混乱が起こりやすい変革時にこそ、これは意味深いことである。

今日の日本で様々な議論が行われている。日本食は世界遺産になり、和食を代表する醤油の大手メーカー・キッコーマンの売り上げの半分以上、利益の四分の三は海外発生であることは今の大変換期の現状を表している。だが一方、農業・食品分野の国際展開を目指している環太平洋戦略的経済連携協定、TPP⁴ 協議に反対している方々もいる。キッコーマン社の現状は、ほかにも数多くの大手日本企業に似ている。貿易ルートが国際化され、日本の国民所得の半分が海外発生这个时代にあり、国防と言う概念は自国の領土を超えたところにあるという論理が成り立つ。その中、日本の領土の守りだけに活動範囲を限定されている日本の自衛隊の役割がどうあるべきかが問われている。その延長線

でシーレーンの安全保障への貢献をどうすれば良いかという議論を行っている。自衛隊の海外派遣、憲法9条の改正論等が浮かび上がって来ている。この様な時、「国益」の概念の下で活動範囲を描こうとする方が多いが、他者のことを十分考えないで判断する危険がある。同志社大学教授、浜矩子氏の言葉を借りると、この時こそ「君富」⁵ 形成に日本は努めるべきと言う論説は生きてくる。わがミュージアムと附属研究所は様々な観点から物事を取り上げなければならないことを感じさせられた。

西洋オペラの歴史では暗い時代もあった。オペラは下品で大衆のモラルを低下させる危険があると考えていたローマ教皇が18世紀の初頭にこの音楽の上演を禁じた。そのとき同じローマ教皇庁内の豪い司教や王族たちは、自分の宮殿で音楽会を行ないオペラを17・18世紀において守り続けた。その時の代表作を“Opera Proibita” (禁じられたオペラ)と名付けたCDを聴いて感動した。もちろん歌手チェチーリア・バルトリの声の美しさにも憧れていたが、一番感銘を受けたのは当時の司教たちの見事な動きだった。原作者ヘンデル、カルダーラやスカルラッティの見事な楽譜に哲学者の歌詞を司教達が加え、宗教音楽の性質を取り入れたこの作曲群は普通のオペラより心の底に訴える力があると感じた。18世紀のローマ教皇のオペラの評価と同様に、15世紀の英国でシェークスピアの芝居に対してもあった。歴史の流れで社会的ストレスが高い時によくあることとも言える。ヘンデル作Aria del piacere “lascia la spina, cogli la rosa” で、「トゲを残してバラを取れ」とバルトリが“Opera Proibita”で歌われているように、人間社会に神が求めている判断に似ていると感じる。この様に感性と理性の架け橋を歩み、社会の大事なものを辛い時期にこそ守り続ける責務が我が国際平和ミュージアムや、まもなく設立予定の附属研究所の使命とも言えるだろう。

1 Henry Jayasena (1931-2009) : スリランカの映画俳優、劇作家。1968年「アパタ プテラ マガク ネタ」、我々に道がないと現地語しか話せない祖父と孫の間の話で、希望の無い未来に向かう若者の悩みは3年後シンハラ族中心の武装団JVPと8年後のタミルゲリラ団誕生の背景にあった社会環境を描いている。

2 Mikhail Bulgakov (1891-1940) : ロシア帝国時代現在のウクライナ国で生まれた医者、文学者、劇作家。ロシア革命後の社会変革時の混乱を人々の人生を鏡にして語り、一方スターリンの命令によって作品の出版を禁じられるが、また一方その作品に憧れももち、革命時のインテリ層の抑圧を描いている作品。White Guardのテーマに引き継いだ芝居Days of the Turbinsをスターリンが15回以上見て高く、評価されたとも言われている。だが人生の後半は彼の命をスターリンが守ったが、作品は出版されず絶望に入る。彼のいちばんの名作Master and Margaritaは亡くなる1年前に完成されるが、四半世紀も過ぎた1967年に一冊の本として出版される。

3 Jathika Vimukthi Peramuna, JVP : 当時のスリランカ政府に対して2回 (1971年と1987-89年) 武装活動を行い数千人の命を残酷に落とされたと言われている。1989年以降武装解除し、議会制民主主義の選挙に参加されているマルクス・レーニン系の政治政党である。

4 Trans-Pacific Partnership, TPPは広域自由貿易圏を目指す国際協定。2006年4カ国 (シンガポール、ブルネイ、チリ、ニュージーランド) で発足され2011年にアメリカ、オーストラリア、マレーシア、ベトナム、ペルーを加え9つの国家間の交渉になる。2012年カナダとメキシコも入り2013年3月15日に日本も交渉に参画を表明する。その後中国と韓国も同年9月と11月に入る。現在の14カ国に又8カ国が検討中と言われている。市民団体、農業充実者、医療保険分野の代表者等がこの動向に疑問を持ち続け協定の批准まで時間がかかると想定できる。

5 「君富」論は浜矩子教授 (同志社大学) より提唱され近代資本主義の基盤である自己中心の思想を対照的に「僕富」論と名付けている。国や地域を越えて相互依存度の高い今日の経済により適格な経済思想と言える浜教授の考え方は原文二氏の「公益資本主義」論 (英 : Public Interest Capitalism) や東京大学名誉教授宇沢弘文氏の「社会的共通資本」論 (英 : Social Common Capital) の概念に近いと言える。3者の共通点であるのは他者や公共を自己 (個) より重視していることである。

国際平和ミュージアム初代館長加藤周一と「小さい花」

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加國尚志

(立命館大学文学部教授)

2015年は終戦後70年にあたります。長く続いた軍国主義の時代が終わり、まがりなりにも民主主義が導入され、武力放棄を定めた憲法が制定された時代、他方で、日米安保条約や、米軍の軍事基地の集中する沖縄の問題など、多くの問題や矛盾を抱えたまま今日にいたる時代を、現在の視点からどのようにとらえ返すのか、ということが問われていると言えるでしょう。そこには戦前と戦後の非連続と連続の両面が、光と影のように見てとれます。

2014年度秋季特別展『ピース☆スタイル』では、戦後の反戦市民運動を取り上げ、「ベトナムに平和を！市民連合」の活動など、戦後史に関わる展示を行いました。戦後の日本における戦争と平和の問題をどのような視点から提示していくか、むずかしい課題ですが、少なくとも、戦争に反対する市民の運動が多様な展開と多くのユニークな工夫を行っていたことを、この特別展では紹介しています。

無謀な戦争と無惨な敗戦の後、経済的な復興を追求し、冷戦体制下においてアメリカ合衆国の軍事的傘下に入りながら、そうした状況の中から戦争に反対する思想を、さまざまな人がそれぞれの仕方で追求した時代、それも日本における戦後という時代の特色でしょう。

国際平和ミュージアム初代館長であった加藤周一(1919-2008)は、戦後日本を代表する知識人の一人でした。膨大な著作を残しましたが、その蔵書や草稿は、現在立命館大学図書館に寄贈され、「加藤周一文庫」として整理が行われています。

加藤周一の文章の一つに「小さな花」というものがあります(加藤周一『自選集』六、岩波書店、所収)。加藤周一が取り上げているのは、アメリカでベトナム戦争に対する反戦運動が高まったときに、ペンダゴンへの反戦デモに参加していた一人の若い女性が、武装した兵士に一輪の花を差し出している写真です。

加藤周一は、この写真について、次のように書いています。

「権力の側に立つのか、小さな花の側に立つのか、この世の中には択ばなければならない時がある。たしかに花の命は短いが、地上のいかなる帝国もまた、いつかは亡びる。(中略)私は、私の選択が、強力な権力の側にはなく、小さな花の側にあることを、望む。(中略)武装し、威嚇し、躡着し、買収し、みづからを合理化するのに巧みな権力に対して、ただ人間の愛する能力を証言するために差しだされた無名の花の命を

私は常に、かぎりなく美しく感ずるのである。」(同書)

この文章を読むと、20年ほど前、私が学生の頃、加藤周一に会って話を聞いたときのことを思い出します。そのときの話題は主に日本文化と日本人についてだったのですが、加藤周一は知識人としての自分自身を「既成社会の枠外」にいて、社会に影響を与えることについて「無力な人間」である、と語りました。

多くの読者を持ち、大手新聞やテレビなどのマスメディアにも登場する著名な知識人なのに、「無力」とはどういうことか、そのときは不思議に思ったものですが、この「小さな花」を読めば、それは「権力を持たない」という意味だったことがわかります。

戦争に反対する反戦、非戦思想のさらに根本に、「権力を持たないことを択ぶ生き方」、「非権力」の思想が必要だ、ということかもしれません。

戦争を遂行する巨大な権力や体制に、「長いものに巻かれる」ように順応するのではなく、まったく無力であり、数においてはわずかなものであるけれども、そうした権力に呑み込まれない一個かぎりの生命のあり方を示す「小さな花」のような資料を、国際平和ミュージアムではたいせつに保存し、展示していくことになるでしょう。力に力で立ち向かうのではなく、力を捨て、自由を択ぶ生き方こそが「平和」の思想につながるということ、国際平和ミュージアムではそのようなことを考える展示を目指していきたいと思えます。



秋季特別展「ピース☆スタイル」で展示中の缶バッジ

平和構築の現場から

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 東 佳史
(立命館大学政策科学部教授)

今回、立命館大学国際平和ミュージアム運営委員を拝命することになり、国際開発援助の現場でキャリアを積み上げてきた元国連職員として、何か平和に関連することを書けとご指示を頂きましたので、勤務した紛争地（カンボジア、東ティモール、アフガニスタン、アチェ）のことを撮ったアナログ写真をデジタルに変換し、あるいはデジタルのままで見ました。

図1から始めると、これは昼間でも人影まばらな90年代半ばのアンコール遺跡です。今ではこの時間帯は立錐の余地もない、ツーリストや売り子さん達で一杯ですが、当時は昼間から政府軍のパトロールがあり、ポル・ポト派が夜になると出没する状況にありました。昼の3時くらいになると政府軍兵士が「もう危ないから帰れ帰れ!!」とせきたてます。ホテルも現在では雨後のタケノコのように乱立していますが、まともなホテルは現在のラッフルズホテルだけであり、それも改装前の幽霊ホテルでした（それでも50ドル）。勤務地のプノンペンからアンコール遺跡群のあるシエムリアップに行くには現在では舗装された道路で6時間あるいは、1時間ほどの空路を利用しますが、当時の陸路移動は未舗装の為、2日かかり、空路は飛行機の状態を考えると危険、すると川ボートで1日かけての到着です。観光客は殆どいません。まさに独り占めのアンコールです。遺跡巡りはプノンペンからボートに乗せてきたオフロードバイクです。所々に政府軍兵士がチェックポイントを作り、その都度通行税を払って回るのです。危険は伴いますが楽しい経験でした。今のシリアやイラクでこの手の遺跡独り占めは可能かもしれません?!!



図1 90年代の人影まばらなアンコールワット遺跡（昼間です）



図2 東ティモール大統領選挙時、炎天下投票を待つ有権者達（2001年）

図2は20世紀最初の独立国、東ティモールでの選挙の様子です。民主化支援という平和構築で重要な場面が選挙支援です。99年のインドネシアからの特別自治を受け入れるか否かの住民投票で、東ティモール人は受け入れを拒否、つまり独立を選びました。選挙支援とはインドネシア占領期の「形式上の選挙」ではなく、選ぶことの意味から啓もうしていく必要がありました。図2はすでに3回目の国連指導の大統領選挙風景ですが長時間ちゃんと列を作り、抵抗運動の英雄シャナナ・グスマオを選びました。地方の投票所設営は困難を極めました。4輪駆動車もバイクも入れない遠隔地では、担いで投票用紙や投票箱を持っていく地味な作業計画（ロジステックス）は作成国連職員の重要な仕事です。ミスは許されません。



図3 国連アフガニスタンミッション（UNAMA）にて防弾チョッキを使用している筆者（2002年）

図3はまだ、今ほど自爆テロが一般化していない比較的安全だった頃のアフガニスタン、カブールでの光景です。爆破予告があり防弾ヘルメットとチョッキを

着用している写真です。重くてたまったものではありません。通勤もランドクルーザーの防弾仕様車です。イスラム圏なので飲酒は厳禁、女性は見つめてもダメ、夜間は外出禁止、常に電話と無線を携帯し安全管理が最優先です。いわば宿舍と事務所の往復で、2か月に1週間の休暇でドバイに出ることだけが息抜きです。精神的にもタフでないと務まりません。ここでは精神状態に疑問符が付く援助関係者を多く見ました。今のシリアやイラクはもっと過酷です。援助関係者は殺害や誘拐の対象となっているのですから。



図4 アチェ、上陸した漁船 (3.11と似通ってます) JICS提供 (2004年)

図4は私たちにはどこか既視感のある光景です。津波で流され家屋の上に乗ったまま座礁した漁船です。3.11と全く同じパターンです。大きな違いは犠牲者と不明者の数です。アチェ大震災と大津波では約28万人と推計され、3.11の犠牲者及び不明者数約3万人は人口密度が東日本の方が高いことを考慮すると、日本の防災意識や設備は優れていたということがわかります。3.11の際には実は、私も前任地の茨城県で震度6以上の地震を経験しており丸5日間は電気も水もなく生活しました。いつも援助する側から、援助される側への転換は新鮮でもありました。職業柄、緊急時の備えはほぼ出来ていたのですが、大津波の犠牲者数と100キロ圏にある福島原発事故の経緯は手回しのラジオでしか知ることが出来ませんでした。しかし、それらのニュースよりも飲料水がどこで手に入るか、どこかのスーパーが営業を始めたかのニュースの方が重要でした。近くのガソリンスタンドでは真夜中の行列により死者が出ました。凍死でした…。

3.11は冬におきましたので、御亡きながら傷むことは最小限に食い止められたようですが、アチェは真夏の12月に起きましたので、きついものがあったよ

うです。援助の仕事をしていると「腐れゆく骸の臭い」は、いつかは経験することです。感染症の蔓延を防ぐ意味からも、ご遺族の意向を遮って埋葬することも必要です。食料配布に割って入ろうとする者たちには強い威嚇も必要となります。恨まれる事も多い職業です。私は何回もDeath Threatを頂いております。



図5 カンボジア プレア ビヒエルー遺跡近くの少年兵と (2011年)

図5は10歳くらいの少年兵です。当時カンボジアは世界遺産に登録されたプレア ビヒエルー寺院近くの所有権未定地区をめぐるタイと戦闘をしており、現場で戦う少年兵と一緒に撮影したものです。兵役は16歳以上なので本人は16歳と言っていました、推定すると小学生くらいのいたいけな子供でした。死への恐怖心も低く、身のこなしも早い、そして小柄なので、高所からの狙撃が得意なタイ軍との戦闘にはもってこいです。戦う動機は、兵士に与えられる僅かばかりのジャングルを開いた土地です。復興景気に沸くカンボジアでは土地価格は年々上昇しています。親が貧しいので兵士となって土地を手に入れたい。親孝行からの志願です。戦闘はタイの2012年の政権交代で終息し、2013年、国際司法裁判所の判決では未定地区はカンボジア領となったので、この少年兵は土地を手に入れた筈です。しかし、ジャングルは切り開かれ森林減少は急速に進んでいます。平和の定着と森林減少、現在の研究テーマです。

キャリア上、よく「援助関係の仕事に就くには、あるいは国連職員になるには」としばしば大学関係者からの講演や講義を依頼されますが、あまり勧められたものではないという結論になってしまい、主催者や依頼者を裏切ってしまう、申し訳ない結果となります。今日はそうならないことを願いつつ…。

『戦争は人間的な営みである—戦争文化試論』 (並木書房、2012年刊) 石川明人 著

立命館大学国際平和ミュージアム
運営委員 金丸裕一
(立命館大学経済学部教授)



冒頭からして、非常に挑発的です。「戦争や軍事には、いかんともしがたい魅力がある」(5頁)と始まり、「これまで日本では、過去の戦争に対する『反省』の名のもとに、戦争や軍事については、とにかくひたすら『否定』することばかりがなされてきた」(14頁)などと続くと、それだけでこの本を書架に戻してしまう人も、少なからずいるのではないで

しょうか。しかしわたくしは、読み進んでいくうちに、自分自身がこれまでに体験してきたこと、あるいは感情に深く刻印されてきたことなどが行間に浮かび上がり、通読したあと強く他者に対して紹介してみたいと願うようになったので、多少場違いなのではという「常識」を捨て去り、ここで簡単にその魅力を紹介してみたく思います。この本は、次のような構成になっています。

※※

序章 戦争は人間的な営みである／第一章 戦争のなかの矛盾、戦慄、魅惑／第二章 愛と希望が戦争を支えている／第三章 兵器という魅力的な道具／第四章 軍人もまた人間である／第五章 「憲法九条」も戦争文化の一部である／第六章 人間を問うものとしての「戦略」／第七章 その暴力は平和の手段かもしれない／第八章 平和とは俗の極みである／あとがき

※※

どうでしょうか？各章のタイトルだけ一瞥して、引いてしまう方も多いのではないかと危惧します。「憲法九条は平和文化」である、あるいは「平和が俗なれば、戦争は聖の極地なのか」と、論理的に反発したくなる読者が、半数を超えているのではないかと思いつつ、キーを叩き続けています。しかし、結論からいえば、表層的かつ感情的な毛嫌いで読み落とすには、余りにももったいない労作だと思うのです。その理由は何なのか？以下、わたくしが行間に読み取った光景を思い出しながら、語っていくことにしましょう。

著者の石川明人さんは、1974年生まれ。1962年生まれのわたくしとは、一回りの差があります。高度成長期の10年以上の時差は、身の回りの光景や体験にたぶん質的な差異をうみ、子供時代の遊びを見ても、ペー

ゴマや凧揚げの世代から電子ゲームの世代へと、大きな転換があったといえるでしょう。著者が、一見すると「軍事マニア」っぽい言表をあやつる理由も、こうした原体験の相違だと考えます。なんとすれば、私たちの世代までが遊んだ輪ゴム銃やセルロイドの刀などは、カッコよさは程遠い素朴な玩具であり、惹き寄せられる魔力は僅かなものに過ぎません。むしろ読書中に鮮明に甦ったのは、1960年代後半、小学校教員をしていた父親に連れて行ってもらった、米軍横須賀軍港付近での反戦デモの光景。日暮れてからもどんと増える人の波と、戦争反対を叫ぶ拡声器、ベトナム戦争期の出来事だったのでしょう。場面一転、より不思議だったのは、1970年代半ばの中学・高校時代になると、すっかり静かになったと感じられた「反戦」の声。何故に、あっけなく歴史の表舞台から退場してしまったのかという疑問が、思考の奥底に染み付いていたように感じます。実は、こうした自分自身にとっても積年の問いであった事柄に対して、この本は大いなる示唆を与えてくれたのでした。

※※

例えば、1970年の日本万国博覧会にともなう浮かれムード、あるいは左翼過激派学生による凄惨なリンチや暴力的運動のあり方に、後退の原因を求めるような、いくらかは説得力がありそうな評論にも接していました。社会人になって以来、平和について学校や社会において教育し、これを世に知らしめるべき恵まれた仕事を与えられました。無論、まわりには数多くの平和を語る先輩方もおります。しかし、それでもなお「反戦」は、わたくしの日常生活の周辺からは、時折は沖縄などの現場で激烈なる復活を示すこともあります。少なくとも横須賀や大津といった暮らしの「現場」に限定した場合、ゆっくりと現代史の脇役に退いたといえるでしょう。さらに、平和や進歩を説いた方々の言説が瞬く間に変容してしまい支離滅裂な状況に陥ったさま、あるいは「黙して語らず」といった「賢い転身」を、茫然と眺めていたことも、一度ならずありました。

石川明人さんが、この本を通じて語りたかったであろう点もまた、一回り下の世代が生活のなかで発見した同質なる「謎」の解明にあるのです。余り書き過ぎてしまったら、この本を手にとってもらえなくなるかも知れませんが、謎解きはもう控えましょう。「自らを正しい人間だとして誰かを裁こうとする者よりも、自らの弱さや愚かさを自覚している者の方が、人を良く理解し、また過ちを繰り返さない」(161頁)という、たいへんに断定的な一文にたどり着くまでの石川さんの思考の旅路については、どうぞ皆様、ぜひとも本書を手にとって追体験していただきたいと願います。

開催報告 (2014年6月～8月)

今号では2014年6月から8月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

第87回

「カンボジアの子どもたち」

会期:2014年6月7日(土)～7月6日(日)

主催:Sports For Cambodia(立命館大学スポーツ健康科学部自主ゼミ)

代表:渡辺空、本企画代表:天笠志保

吉川万紀、野口和真、山田遼介、小宮由紀(以上4回生)

小林佑太郎(2回生)

共催:立命館大学国際平和ミュージアム

Sports For Cambodia (スポーツ・フォー・カンボジア) は立命館大学スポーツ健康科学部に所属する学生の自主ゼミです。2012年に立ち上げ、現在7名で活動しています。1970年代のポル・ポト政権時代の影響で今なお教育体制が整わず、体育の授業がないカンボジアの学校に、体育授業やスポーツを普及させることを目的としています。

本展では、2013年5月に訪れた首都プノンペン郊外にあるチェレ村の小学校で行った身体測定・体力測定や子どもたちとの交流の様子、またシエムリアップの孤児院に通う子どもたちを訪ね交流した様子を、写真や解説文とともに20枚のパネルで紹介。活動を紹介するPR映像も上映しました。企画した学生たちは、この活動を通して、スポーツには国際支援・国際開発の意義を伝え、笑顔や希望を届ける力があること、また教育やスポーツを行うためには何より平和でなければいけないということを強く感じていると言います。

会期中にはスポーツ健康科学部基礎演習クラスの団体見学があり、企画メンバーによるギャラリートークも開催しました。彼らの今後の活躍に期待したいと幸いです。



見学者に解説する企画代表の天笠志保さん

第88回 夏休み企画

「健康はお国のために—スポーツと戦争—」

会期:2014年7月12日(土)～8月29日(金)

主催:立命館大学国際平和ミュージアム

私たちは健康のため、また豊かな人生を送るために運動をし、スポーツを楽しみます。しかし、一五年戦争当時は運動・スポーツも戦争を支えるためのものとして利用されていました。本展では、当館の収蔵資料の中から約50点を展示し、当時の健康観やスポーツが人々をどのように戦争に協力させる手段となったのか、その歴史を紹介しました。

導入部では明治時代から戦前までの日本における近代スポーツの普及について展示しました。日本へのスポーツの普及は比較的早く、展示した日米大学野球の絵葉書(1908(明治41)年)からは既に野球観戦に多くの人々が訪れていたことがわかります。

戦争が始まるとスポーツや健康観に変化が生じます。娯楽・競技として楽しまれてきたスポーツは鍛錬と見なされるようになり、体操や水泳、登山など誰でも行える種目が推奨されます。健康の概念もそれまでは病気のない状態を指しましたが、戦時中には、兵士として、また兵器・食糧の増産を担う労働者として必要とされる壮健な身体をも指すようになりました。

健康やスポーツと戦争の関わりはそれだけではありません。スポーツは政治にも利用され、日本主導で開催した東亜競技大会でアジア諸民族の融和を演出したほか、兵士や労働者確保のため、様々な保健衛生政策を進める等しました。

本展は展示資料の選定や設営といった作業を、博物館実習の内容としても取り組みました。また本学産業社会学部スポーツ社会専攻の学生のみなさんの見学がありました。



軍事教練を受ける力士

『写真週報』第171号 1941(昭和16)年6月(発行)

石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」

会期：2014年9月14日(日)～10月9日(木)

会場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階展示室内

石川文洋氏はベトナム戦争の戦場を撮影した数少ない日本人カメラマンのひとりとして、南ベトナム政府軍・アメリカ軍に同行取材し、戦争の実態を伝える作品を数多く発表しました。戦争終結後は、ベトナムのみならず世界各国の紛争を取材し、76歳となった今も、枯葉剤・不発弾被害者、ベトナム戦争による後遺症と戦後の復興のほか、沖縄基地問題など、精力的に取材活動を続けています。石川氏がトンキン湾事件（1964年）直後に初めて、ベトナムを訪れてから50年となる今年、国際平和ミュージアムでは特別企画展示として、「ベトナムの50年」を撮り続けた石川氏の写真展を開催しました。

会場には、一点一点に自筆の解説がつけられた自選46点の写真（1965～2013年撮影）と、戦場で使用した望遠カメラを展示しました。ヘリコプターで農村を攻撃するアメリカ軍、軍事作戦を行うアメリカ軍とその前を市場へ向う農民の女性、年若いベトコン、憎しみ合う同胞、負傷するアメリカ兵、枯葉剤の影響で障害をもって生まれた子どもたち…石川氏の写真と言葉は、第二次世界大戦以降最大の戦争といわれるベトナム戦争の凄惨さと戦後の復興、そして今なお続く戦争の被害を余すところなく伝え、戦争の本質を問いかけました。「命^{メデ}どう宝」（＝命こそ宝）とは石川氏の出身地である沖縄の言葉です。それをタイトルに付した写真には、射殺され大地に仰向けに倒れた農民の姿が写し出されていました。戦闘の最前線で取材し、計り知れない数の無残な死を見続け、自身も幾多の危機を乗り越えてきた石川氏のメッセージは、来館者の心にも深く刻まれたのではないのでしょうか。



作品にはそれぞれ石川氏の自筆による詳しい解説がつけられた。



「私は再会が好きだ。お互いに生きているから再会ができる。」（石川文洋・文）
戦争終結から40周年を迎える来年2015年にはベトナムを訪れて、彼女たちに再会する予定だそうだ。



多くの子どもたちが枯葉剤による障害を持って生まれている。アメリカは未だその因果関係を認めていない。

来館者の方のアンケート

●息子が立命館大学に在学しているうちに、一度たずねてみようかと今日伺わせていただきました。第二次世界大戦についてはある程度知識を持っていましたが、自分が子どもの頃、ニュースの映像とともに聞いていたベトナム戦争については何の知識も持ち合わせておりませんでした。コーナー最初に登場する何の知識もなくベトナムに派遣された若い兵士のように。無知、そして貧困こそが戦争を生み出し、自分さえよければという思いが戦争を助長すること。特に経済。たくさんの写真の中から、ベトナムの人々の思いが聞こえてくるようで、涙があふれました。
(群馬県 50代 教員)

●写真にそえられた石川さんのコメントがとてもよかった。簡潔だが、戦争への思い、ベトナムの人への思いがことばになってあふれていた。再会の写真が、温かく、心なごませてくれた。
(京都府 70代以上)

●写真のキャプションとともに、そのときの状況や被写体の言葉がつづられており、ただ写真を見ただけでは得られない情報を知ることができた。白黒写真からカラーになった瞬間、白黒だからこそ直視できたのであって、実際には、目を覆いたくなるほどの惨状が想像できた。白黒とカラーと両方あることで、感じ方は変わるように思った。
(京都府 20代 映像学部4回生)

2014年度博物館実習受け入れ

学芸員資格取得を希望する学生にとって「総まとめ」の科目である博物館実習。ミュージアムでも毎年受入を行っています。今年度も6月29日より7月の平日、土日を含み5日間で実施しました。受け入れをした10名の実習生の在籍する大学を紹介すると、本学文学部、映像学部、京都橘大学、奈良女子大学となりました。

例年お伝えしていることですが、実習指導の内容については、文部科学省から出された「博物館実習ガイドライン」にできるだけ沿う形で進めることを前提とし、「いつでも必要な」ミュージアムの維持管理に欠くことのできない内容のもの、この時期でないことのできない「旬」な内容のものを織り交ぜることにしています。

「いつでも必要な」実習内容の一つには、収蔵庫環境の管理があります。この管理が良好でないと、害虫やカビの発生の原因となるため、博物館としては大きな問題となります。また、寄贈資料を受け入れる際に、長期に渡り保管されていたものの中には、カビやホコリがついていることもあり、それらは、くん蒸や、職員による適切な処置後に収蔵庫に収めます。ミュージアムの収蔵庫は地階にあるため、一年を通して、温度変化は少ないのですが、湿度の変化に注意が必要な環境です。また、昨年完成した外収蔵庫は、この一年、特に温度変化に注意しながら管理を続けています。そういった温湿度の管理には、温湿度計を使って温湿度を記録し、資料保存に理想的な数値の範囲を維持するように努めています。温湿度計は、収蔵庫以外にも常設展示場や資料整理を行う作業室、特別展示の開催場所となる中野記念ホール等に設置しています。それら温湿度計の数値のズレを確認するために、毎年1回アスマン通風乾湿計を使って校正作業を実習内容として取り組んでいます。

その他、収蔵庫内の清掃、受入資料の整理等、学芸業務が中心となりますが、館長による講義や、広報、庶務、イベント業務といった館の運營業務説明も取り

入れ、国際平和ミュージアムの理念や設置目的等を包括的に理解できるようにしています。

「旬」な内容としては、7月12日(土)～8月29日(金)に開催した夏休み企画第88回ミニ企画展示「健康はお国のために―スポーツと戦争」展示準備・設営作業に関連した作業があり、これが今回の実習の中心となりました。この企画は、今年6月から7月の3回に分けて、ここ数年実施されている、当大学スポーツ健康科学部基礎演習クラスの授業見学にあたり、担当教員と来館時に学生と展示をひきつけるしかけとして、スポーツや健康に関係のある収蔵資料をいくつか紹介したことがきっかけとなったものです(展示については、11頁に紹介しています)。

展示が開幕するまでには、①企画の立ち上げから、②展示資料候補を選定・吟味し、③必要な解説・キャプション等を準備すると共に、④展示レイアウトの検討⑤設営作業。といった段階がありますが、今回の実習生には②～⑤の段階を経験できる内容としました。

実習生全員で展示企画・意図を理解した上で、展示候補資料を整理し、その中から一部の展示資料の選定を任せました。また、資料は実際に手に取ることは不可能なため、それらの複製の製作や、大型パネル、資料キャプションの製作などにも取り組んでいただきました。

これらの作業を通して、学芸員として必要な資料の扱い方や、資料整理の手順、展示方法の検討といった内容を身をもって取り組める内容となりました。実習の最終日には、職員や学生ミュージアムスタッフとして業務を行う学生に向けてプレゼンテーションを行いました。5日間の実習の中で、実習生全員が、ただ、指示通りに作業を行っていたのではなく、個々に目標を掲げて取り組んでいたことが伺える発表となりました。

(学芸員 岸本菜穂美)



パネル製作作業



展示設営作業



2014年度実習生

2014年8月立命館土曜講座

「若い世代に語り継ぐ戦争と平和—学徒出陣70年から、戦後70年を見すえて」

8月2日：第3102回 白井 厚 慶應義塾大学名誉教授
「『学徒出陣』と大学の戦争責任」

「『学徒出陣』と大学の戦争責任」と題して、慶應義塾大学で長年、戦時大学史、大学と戦争責任、大学における戦没者追悼のあり方などを研究されてきた白井厚教授から、若い世代に語り継ぐ戦争と平和に関して思いが語られた。

日本の侵略戦争によりアジアで2000～3000万人が非業の死を遂げた、アジア太平洋戦争とは何だったのか。戦後50年を経て出された「村山談話」は、国策を誤り、植民地支配と侵略戦争を行い、アジア諸国の人々に多大の損害と苦痛を与えたと表明した。何故そのような国策に皆賛成したのか。当時、厳しい思想弾圧が行なわれたが、いやしくも最高学府であり、真理探究を業とする大学からは何の批判もなかったのか。戦時中、皇国史観と軍国主義で覆われ、総動員体制のなか大学は思考停止し、戦争への協力を余儀なくされた。戦局悪化の厳しい局面で「学徒出陣」が行われ、学生が特攻隊要員として駆り出されていったが、大学が下

支えた責任は何であつたのかが述べられた。

大学の戦時下の戦争責任にふれた後、大学の戦後責任として、

①敗戦後も戦争の総括・反省をせず、戦中の大学のあり方について検討していない、②自校の犠牲者たちをかえりみ、追悼すること少なく、忘却に委ねたままである、③この戦争の調査・研究が少ないことが、国民が将来もこの歴史から学ぶ機会を狭めている、と語られた。

質疑応答では軍国主義、東京裁判史、国家総動員体制下での大学の状況など、いくつかのポイントが出され、大学が真理探究の場として国家の圧力に左右されない社会的責務を全うすべき状況にある旨、思いを語られた。



講演を行う白井厚教授（慶應義塾大学）

8月30日：第3103回 水島 朝穂 早稲田大学法学学術院教授
「『人貴キカ 物貴キカ』—防空法制から診る戦前の国家と社会」

NHK朝の連続テレビ小説「ごちそうさん」の今年2月第4週の放送で、主人公の夫が逮捕されるシーンが出てくる。理由は、「空襲に備える防空訓練で、火を消さずに逃げるよう指示した」というもの。この背景には、「防空法」という法律があった。戦争末期、全国の都市に大量の爆弾と焼夷弾が落とされ、全国で約60万人の市民が命を落とした。そのなかには、防空法が退去の禁止を定めていたことによって逃げられなかった人たちがいた。防空義務の強化により、国民は「命を賭して各自の持ち場を守る」ことを求められ、空襲から逃げるのが許されない状況に置かれていたのである。例えば、1945年7月28日の青森空襲では、米軍の空襲予告ピラ（伝単）を見て市民が避難したところ、県知事が配給を停止すると脅して、避難者を青森市に戻した。その日の夜にB29が予告通り来襲し、728人が死亡している。避難したのに無理やり連れ戻されて死んだ人々。ここに、「守るべきものは何か」をめぐる防空法の思想が端的にあらわれていた。水島教授は持参された実物の焼夷弾や、防空に関する国民の心構えを記した当時の出版物の数々、実際に撒かれた伝単などを書画カメラで映し出し、防空法の目的が

あくまでも国家体制の防護であって、国民の生命・財産の保護ではなかったことが実証的に明らかにされていった。

むすびとして、防空法の問題を論じる現代的意義—一般戦災被害者援護法制定の意義、国民保護法制の怪しさ、東日本大震災と災害対策法制の思想と構造、集団的自衛権の問題性など、「守るべきもの」の倒錯をもたらした悲劇は、現代にも通ずる問題、歴史が繰り返されようとしていることへの危険性などが語られた。

質疑応答では、市民の役割・責任として何をなすべきか等の質問に、大学が真理探究の場として国家の圧力に左右されない社会的責務を全うすべき状況にある旨、思いを語られた。

聴講者から「たくさんの貴重な史料・資料によるモノ語り」に始まる講義は、最後まで素晴らしくわかりやすく、刺激的だった。「防空法から、現代を鮮やかに診る」という話は大変興味深い。」などの感想が多く寄せられた。



青森空襲を説明する水島朝穂教授（早稲田大学）

小中学校教員対象下見見学会2014

開催日： 7月29日(火) 30日(水) 31日(木)
8月 1日(金) 26日(火) 27日(水)
28日(木) 29日(金) (8回)

開催時間：13：00～15：00

所要時間：120分

参加者：39校 102名

《内容》

- 安齋育郎名誉館長による平和講義
- 展示見学（ボランティアガイドの解説あり）
- 収蔵品（もの資料）の紹介、教育教材としての利活用と貸出教材キットの紹介
- 個別相談会（見学受付・平和講義やガイドブックの事前送付等、各種サービスの案内）

当ミュージアムでは、2006年から毎年7月、8月に教員向けの下見見学会を開催しております。今年も近畿圏の小中学校を中心に39校102名の先生方にご参加いただきました。

安齋育郎名誉館長は、平和講義の中で、「戦争がなければ平和と言えるのだろうか？戦争がなくても、直接的、構造的、文化的暴力が存在し、それによって一人ひとりの能力が豊かに花開くのが阻まれている状態は、平和とは言えないのではないか。」と疑問を投げかけました。そして、今後の平和教育のあり方につい



安齋育郎名誉館長による平和講義

て、「みて かんじて かんがえて その一步をふみ出そう」という当館のコンセプトを紹介し、主体的に考える姿勢をはぐくむことが重要、と講義を締めくくりました。

当日参加された先生方からは「講義を聴いて、“平和”に対する概念を整理することができた。」「具体的に児童への指導イメージがわいた。」「実際の写真や映像、使われていた物などが豊富でよく分かった。」といった感想が多く寄せられました。また7月・8月の学校による下見見学会は84校266名、見学会とあわせると合計123校368名の参加がありました。

ボランティアガイド学習交流会を開催

昨年度から連続して開催しているボランティアガイド学習交流会が、「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること」をテーマとして、8月23日に開催されました。このテーマは昨年度に初めて開催された学習交流会の最初のテーマと同じですが、今回はそのパート2として、社会的な状況を踏まえ展示のあり方とガイドとして活動することについて、具体的な事例に基づいて、講義と質疑応答、意見交換を行いました。

今回のボランティアガイド学習交流会には、ボランティアガイドの皆さんをはじめ、第9回ボランティアガイド養成講座を修了された方、学生ミュージアムスタッフなど合計51名の皆さんが参加しました。

まず最初の講義では、安齋育郎名誉館長から1時間の講義がありました。続いて講義に基づきつつ、最近の社会情勢も念頭においた質疑応答が行われました。

一旦休憩を挟み、後半はグループごとに別れて意見交換を行いました。平和創造や過去の戦争の歴史に関わって、集団的自衛権や慰安婦問題、展示に関する工夫やガイド解説についての取り組みなど、最近クロー



安齋名誉館長による講義

ズアップされている事柄を中心に幅ひろい意見の交換が行われました。来館者への対応を含めたそれぞれの皆さんの取り組み・経験なども話題にのぼり、熱心な討議が行われました。

最後に意見交換の内容を各グループから発表し、出席した皆さんの間で意見を共有しました。

国際平和ミュージアムでは、今後も時宜に応じたテーマで学習会を開催する予定です。



グループごとの意見交換の様子

茨木市非核平和展

会 期：2014年7月29日（火）～8月3日（日）
 会 場：茨木市中央図書館
 主 催：茨木市
 協 力：立命館大学国際平和ミュージアム
 茨木市原爆被害者の会
 展示場所：2階 ギャラリー（約30.5㎡）

「茨木市非核平和展」は、茨木市が毎年開催しているもので、来年2015年度立命館大学大阪いばらきキャンパスが開設されるのにあたって、茨木市より展示への協力要請を受けて取り組んだものです。

企画を考えるにあたり、茨木市の学校、児童・生徒、市民の皆様に対して、2012年度より国際平和ミュージアムが運用を開始した貸出教材キット・パネルの広報と、それらを通してさらなるミュージアムの広報・普及を行なうことを目的としました。

2種類ある貸出教材キットのうち、児童労働、子ども兵士、環境問題といった、現代の諸問題など12のテーマを紹介している「さいころくん」キットを会場に展示。この他、ミュージアムの紹介パネルやチラシ等も並べました。



ナビする学生

会期最終日の8月3日（日）には、通常ミュージアムの2階常設展示室で、来館者に「さいころくん」を使っ

て解説を行っている学生ミュージアムスタッフ2名が会場でも解説を行いました。

ミュージアムを見学中の来館者に解説を行う普段の業務とは違い、会場にふらっと立ち寄った市民の方に声をかけ、解説をするのは初めての経験となること、また解説に必要な設備も十分でないこともあり、何度か話し合いを行い当日に望みました。普段の業務では使わない道具等も準備して、できるだけわかりやすく伝えることを目標に迎えた当日は、館内の職員の方のご協力もあり、約40人の方々に解説を行うことができました。

途中、茨木市の木本市長にもお立ち寄りいただき、学生の解説に熱心に耳を傾け、時にはご自分の体験をお話いただく場面もありました。

会場では、広島平和記念資料館や、茨木市原爆被害者の会の方より借用したパネルや資料が展示され、又、平和アニメの上映も行われていました。夏休み期間中ということもあり、各会場はスタンブラリーのスタンプがおかれ、家族で会場を回る姿も多く見られました。ミュージアムのことを知っていただくきっかけとなったことは勿論ですが、このような企画は、普段あまり意識することが少ない「平和」について、改めて考えるきっかけとなることを再確認する機会となりました。



茨木市木本市長も来室！

第8回国際平和博物館会議参加報告

2014年9月19日（金）～9月22日（月）に開催された第8回国際平和博物館会議（韓国ノグンリ平和記念館）に出席しました。会議に先立ち、ノグンリ平和賞の授賞式に参加（人権賞は平和首長会議が受賞）。会議は3日間、初日は基調講演、その後は分科会とシンポジウムが続き、途中にノグンリ平和記念館や、朝鮮戦争中のアメリカ軍による市民虐殺ノグンリ事件がおきたトンネルの見学、寺院の観光などもありました。閉会式には、虐殺の生存者が登壇したことも大変印象的でした。

今回は、分科会1-Aにて「2010年代の立命館大学国際平和ミュージアム―大学立の平和博物館としての役割」と題して報告。当館は近年、学生の展示制作や、講演会での学生と講師の対話の設定など、見たり



ノグンリ平和記念館にて

感じたりするだけでなく、学生が考え実行する機会を持つことに力を入れた取り組みを増やしています。平和博物館を取り巻く状況が厳しくなる中、ミッションを意識した取り組みの重要性が増すと考えます。この分科会では他に「平和教育の拠点としての平和博物館：一方向型のアプローチから、双方型アプローチへの転換」（川崎市平和館専門調査員 暉峻僚三）、「和解へ導く認識：芸術家による民族間理解の促進」（ガリリインスティテュート（イスラエル）ディレクター）の報告がありました。3館とも背景や取り組みは異なりますが、若い世代へのアプローチの重要性と、プロジェクトの中で彼らの自主性を引き出すことの重要性が確認されました。



市民虐殺ノグンリ事件の現場

今回の会議には、日本からの参加者も多く、特にポスターセッションでは日本の多数の事例報告がありました。インドや中国からの参加もあり、平和博物館への関心がアジア地域で高まっていることが感じられました。（学芸員 兼清順子）

イランのテヘラン平和博物館

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根 和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

2014年9月19日から22日まで、韓国のノグンリ記念館で第8回国際平和博物館会議が開催されました。そこへは35か国にある25の博物館から175名参加しました。また14か国から30名の留学生が参加して、国際色豊かでした。その後9月24日から10日間、イランのテヘラン平和博物館から国際平和ミュージアムへ、5名の訪問者がありました。今回はテヘラン平和博物館について紹介したいと思います。

以前医師でテヘラン平和博物館の理事であったシャハリア・カテリ氏が、国際平和博物館を訪問されたことがあります。彼は現在オランダのハーグにある化学兵器禁止機関（OPCW）で勤務されています。それは1997年4月に発効した化学兵器禁止条約に基づいて設立された国際機関で、国際的な化学兵器の全面禁止及び不拡散のための活動を行っています。

テヘラン平和博物館は、テヘラン市公園にあり、テヘラン市が建物を提供しました。イラン・イラク戦争（1980-1988）で使用された毒ガスの犠牲者の記念碑と平和博物館が、2007年に創設されました。それらは化学兵器被害者擁護協会によって創設されました。2004年に毒ガスの犠牲者が広島平和記念館を訪問し、また翌年「平和のための博物館国際ネットワーク」の代表であるピーター・ヴァン・デン・デュンゲン博士と話す中で、テヘラン平和博物館を創設し、平和教育を推進することになりました。

そこでは国際人道法、軍縮、和解、平和の文化などについて取り組んでいます。また毒ガスの犠牲者の体験に若い人々が耳を傾けて学ぶという取り組みもしています。若者は化学兵器の犠牲者の状況や軍縮の重要性について学び、また自分たちが平和構築をしていく責任を自覚するようになるそうです。

興味深いことに、このテヘラン平和博物館の中に平和首長会議の事務局があります。2014年8月7日にテ

ヘラン平和博物館の関係者が広島市長を訪問したことが、ウェブサイトで紹介されています。驚いたことに、この一年間で270もの市が平和首長会議に入ったそうです。つまりテヘラン平和博物館では平和教育だけではなく、平和の活動も活発にしていることがわかります。また芸術を使って平和を求める活動も行っており、今後子ども達の絵画を交換して展示するなどの交流をすると良いと思います。

テヘラン平和博物館のボランティアの方には山村邦子さん(76才)という女性がいて、イラン・イラク戦争で息子（当時19才）をなくされたそうです。彼女のおかげで日本とイランの交流が行われていることも印象的です。

テヘラン平和博物館の5名は、平和友の会の谷川佳子さんたちを中心に国際平和ミュージアムにおけるボランティア活動などについて学びました。またホームステイや観光名所の訪問、学生のクラスや国際平和ミュージアムでテヘラン平和博物館の紹介をし、学生や留学生と交流をすることができました。テヘラン平和博物館の5名のうち1名が大学院生（ソホラブさんは日本語が上手で通訳担当）、また2名が学生でした。この交流会の最大の成果は、立命館大学の学生や留学生、また平和ミュージアムのボランティアの方々と友達になったことです。関西空港でのお迎えから、セミナーハウスでの合宿などずっとお世話をしてくれた柳谷晃太さん（学生）などは、今後イランへ行ってみたいと話していました。

ベールを被った女性が4人来られましたが、宗教や習慣が異なっても人間は本質的に同じであると考えさせられた交流でした。

今回アメリカの平和博物館を紹介する予定でしたが、テヘラン平和博物館の訪問者があり、急遽変更いたしました。次号に紹介いたします。



立命館大学国際平和ミュージアムで学生・留学生と交流



国際平和ミュージアムボランティア・学生と制作した平和のバナー

ガイド活動七年目にして思うこと

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 松田愛子

ボランティアガイドになって7年が過ぎました。毎年、養成講座を終了された新しいメンバーがガイド活動に参加されていますので私など古参に属するようになりました。

しかし7年経っても未だに「今日は満足のいくガイドができた」「来てよかったと思ってもらえた」と確信の持てる日はあまりありません。

私は長らく学校に勤めておりました。学校の授業なら、生徒より一段高い教壇から一方的にしゃべって済むこともあります。それでも「今日は授業展開がうまくできた!」と自己満足することも可能です。生徒一人一人が、何をどのように学んだかまでは考えなくても済むことが多いのです。生徒との付き合いも1年の長きにわたります。しかし、ミュージアムに来られる方々とは同じ平面に立って間近に顔を見ながら話をします。

来館者中、大勢で来る子どもたちはポイントガイドがほとんどですが(時に小規模な学校等はグループガイドもある)大人の方はグループガイドが多く、時間も50分とか長い時には2時間近くになることもあります。いずれにしても至近距離で顔を見ながら話をするわけですから互いの表情が読み取れます。しかも多くの方と「一期一会」一回勝負です。くどいガイドをしてウンザリした顔をされたこともあります。さっと切り上げて別の展開にすればいいのですが、時によっては、なかなか切り替えが難しいことがあります。担当曜日によっては、月1回のガイドがあったり無かったりすることもありますので、余計に舌と記憶がもつれがちです。

私たちガイド仲間(平和友の会・ガイド部会)は常々「平和ミュージアムの来館者は、ガイドが無ければさーっと通り過ぎてしまわれることが多い(特に子どもたちはそうです)。理解を深めてもらうには、ガイドがあってこそ!」と自負してきました。戦争、平和について初めて学ぶ子どもたちにも、知識や経験のある大人にも、心に届くガイドをしていくためにはどうしたらよいか? 7年目の古参になってなお私の課題です。

ガイドのみなさんは大変学習熱心で、たいてい自分

の「学習ノート」を作っておられます。戦争体験のない私は「十五年戦争」に関する部分は専ら本を読んで知識を増やし、ガイドに使えるように整理したノートを作ってきました。また過去とも関わって次々に生起する問題については、大学や市民団体、友の会などで計画される学習会や講演会、見学会に参加してきました。それらの学習で得た知識や、時に他のガイドさんの説明を聞く機会があって「これはいただき!」と思ったものもノートに取り込んで追加しています。久々のガイドの日はそのノートを読み返して備えます。

そんな私がガイド活動について最近強く意識するようになったことがあります。

地階の展示場は「十五年戦争」コーナーだけで実に多くの事が展示されています。あの展示全般を片っ端から説明するとどれだけ時間があっても足りません。それに、このミュージアムが来館者に伝えたいこと、「戦争の加害、被害の事実を伝える」だけでなく「平和をつくりだす努力をしてきた歴史」、加えて「その一歩を踏み出そう!」という「呼びかけ」に込めていくことの大切さをも伝える必要があると思うのです。これは2階の展示「戦争が無ければ平和でしょうか」という問いかけにつながることもになります。

「加害や被害」の事実、これは「恐ろしいこと・悲しいこと・愚かしいこと」で、「絶望」という言葉に置き換えることができます。ガイド活動の中で「絶望」を伝えるだけでなく、「戦争を批判し続けた勇気ある人々」や「平和創造」のために働いた人たちのこと、他の言葉で言いかえれば「希望」という言葉が当てはまると思います。立命館平和ミュージアムのガイドとして「絶望」だけでなく「希望」を伝えたい、そのためにガイド内容をどのように構築していくかが私にとって差し迫った課題になっています。

ミュージアムを見学した子どもたちからしばしば発せられる言葉「あの戦争の時代に生まれていなくてよかった!」を超えて、未来に向かって主体的に平和に関わっていく大切さをどう伝えられるか、これからも試行錯誤しながらガイド活動を続けたいと思っています。

2014年4月
～2014年10月
入館者状況

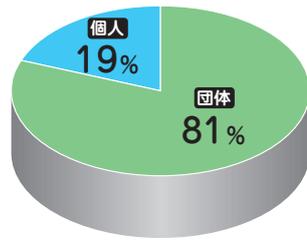
◎開館日数

175日

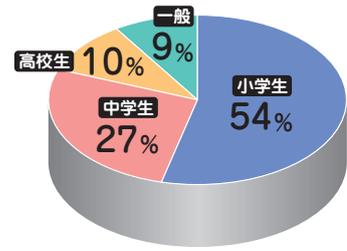
◎オープン後常設展入館者数累計

921,808名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2014年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	人数/開館日数
総入館者数/開館日数		2,007/25	5,715/27	3,812/25	3,653/27	2,391/26	2,759/18	10,609 /27	3,0946/175
来館90万人	2014年6月17日、来館者90万人 (堺市立金岡南小学校6年生)								
特別展	春季特別展 「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」	会期：5/3～7/19 (67日間)							9,522
	特別展 「世界報道写真展2014 -WORLD PRESS PHOTO 2014-」	会期：9/17～10/12 (22日間)							5,101
特別展示	京都 (立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール)	会期：10/14～10/30 (17日間)							1,627
	滋賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス エボックホール)	会期：10/21～12/14 (10/21～10/31)							4,333
ミニ企画展示	小計								20,583
ミニ企画展示	「学徒動員、学徒出陣 学生・大学と戦争」展 [BKCサンクスデー] (びわこ・くさつキャンパス セントラルアーク) (6/1)	石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」 (国際平和ミュージアム ミニ企画展示室) 会期：9/14～10/9							オープン
	第85回 ベトナム戦争の傷痕	会期：4/3～4/29							-
ミニ企画展示	第86回 ロベルト・ユンクの生涯「ヒロシマを世界に伝えるー核の被害なき未来を求めてー」	会期：5/13～6/1							-
	第87回 カンボジアの子どもたち	会期：6/7～7/6							-
ミニ企画展示	第88回 健康はお国のために -スポーツと戦争-	会期：7/12～8/29							-
	第89回 第8回立命館附属校 平和教育実践展示 (守山、小学校、宇治、長岡京、慶祥)	会期：10/12～12/19							-
講演会ほか	「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」	オープニングトーク：鄭周河 (写真家)、徐京植 (作家)、河津聖恵 (詩人) (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (5/3)							122
	トークセッション：高橋哲哉教授 (東京大学)、庵治由香准教授 (立命館大学)	トークイベント 福島を見つめた留学生たち (国際平和ミュージアム 中野記念ホール) (6/7)							66
講演会ほか	来館90万人記念セレモニー (堺市立金岡南小学校6年生)	NGOワークショップ 男も女も働きやすい社会へ ～身近にある貧困を見てみよう、考えてみよう～ (国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/19)							39
	講師：山本知恵 (京都YWCA総幹事)	※第1回国際平和セミナー「Lessons of 1914 for Asia today」 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (7/16)							47
講演会ほか	講師：Dr.phil.habil.Andreas Herberg-Rothe	夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2014 (国際平和ミュージアム 1階ロビー) (7/26)							97
	一被爆し傷ついた故河本明子さんのピアノ	平成26年茨木市非核平和展「さいころくん」を通して見る世界 (茨木市立中央図書館) (7/29～8/3)							オープン
講演会ほか	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会 (8日間・7/29、7/30、7/31、8/1、8/26、8/27、8/28、8/29)	立命館土曜講座「若い世代に語り継ぐ戦争と平和 一学徒出陣70年から戦後70年をみすえて」							103
	3102回「学徒出陣」と大学の戦争責任	講師：白井厚名誉教授 (慶應義塾大学) (末川記念会館 講義室) (8/2)							230
講演会ほか	3103回「人貴キカ 物貴キカ」ー 防空法制から診る戦前の国家と社会ー	講師：水島朝穂教授 (早稲田大学) (末川記念会館 講義室) (8/30)							207
	ボランティアガイド学習交流会	「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること パート2」 講師：安斎育郎名誉館長 (国際平和ミュージアム 2階会議室) (8/23)							51
講演会ほか	※第2回国際平和セミナー	平和ワークにおける芸術アプローチ・ワークショップ「平和創造のための芸術アプローチ：紛争解決学から学ぶ」 講師：奥本京子教授 (大阪女学院大学) (国際平和ミュージアム 2階会議室) (10/2)							16
	「世界報道写真展2014」講演	講師：豊田直巳 (フォトジャーナリスト) (以学館4号教室) (10/7)							154
講演会ほか	【京都会場】衣笠キャンパス	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス							593
	※【共催】「遺言 原発さえなければ」映画上映会 豊田直巳監督トーク (人文研P「暴力からの人間存在の回復」)	(以学館2号教室) (10/8)							120
講演会ほか	第8回国際平和博物館会議 (35カ国、175人出席)	テヘラン平和博物館研修生受け入れ							40
	※【後援】国際地域研究所 EUプロジェクト講演会	"The EU Charter of Fundamental Rights and Its applicability to the Member States" 講師：Prof.Dr.Ferdinand Wollenschläger (アウグスブルグ大学) (末川記念会館 講義室) (10/21)							27
講演会ほか	国際交流報告会 (第8回国際平和博物館会議、テヘラン平和博物館交流)	(国際平和ミュージアム 2階会議室) (10/28)							28
	小計								2,097

※立命館大学国際平和ミュージアム附属平和研究所準備室にて行った企画 (共催、後援を含む)

編集後記

2015年は終戦後70年を迎えます。今回の「ミュージアムだより」をご覧いただくと、2014年度の企画として石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」や、「ベ平連」の活動を紹介した秋季特別展「ピース☆スタイル」など、第二次大戦以降の平和の問題を考える企画が立てられていることに気づかれたと思います。憲法9条により戦後の日本は直接に戦争に参加してはみませんが、朝鮮戦争による特需、ベトナム戦争における沖縄の基地使用、イラク戦争への自衛隊派遣、そして「集団的自衛権」の容認へといたる流れは、戦後の日本が「戦争に参加しないから平和な時代だった」と言ってすませることのできない、大きな問題を抱えた時代であったと言えるように思われます。こうした認識に立って、立命館大学国際平和ミュージアムでも、戦後の日本と世界を考える企画を立てていく予定です。

また2014年も、国際的な交流活動の盛んな一年でした。今号でも、韓国ノグンリで開催された「第8回国際平和博物館会議」について、安斎名誉館長と兼清学芸員の報告を掲載しています。アジアで平和博物館への関心が高まっていることは、日本における平和博物館の置かれる状況を考えるにつけ、アジアの平和博物館との連帯は欠かすことのできないことです。またイラン・テヘラン平和博物館から5名の方が、国際平和ミュージアムに交流にいられました。山根副館長による紹介記事を掲載していますが、平和を願う市民の気持ちは、国境も宗教も乗り越えてつながっていくことでしょう。

加國尚志

※本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はご遠慮ください

ミュージアムインフォメーション

ミニ企画展示室

第89回ミニ企画展示

●「第8回立命館附属校平和教育実践展示」開催中 2014年10月12日(日)～12月19日(金)

会期：12月 7日(日)～12月19日(金) 立命館慶祥中学校・高等学校（北海道江別市）

展示内容

- もうすぐ20周年 北の立命館が考える平和
- ・中1 社会科 13歳が考える「平和」
- ・中2 美術 「平和」を象徴するバルサタワー
- ・中3 ディスカッション報告「明日を語ろう 地球市民のつどい」
- ・高1 平和学習WEEK 実践報告
- ・高3 アジア学 「共生」を考えよう

※立命館守山中学校・高等学校、立命館小学校、立命館宇治中学校・高等学校
立命館中学校・高等学校は終了しました。



昨年度の展示の様子（慶祥中学校・高等学校）

＜立命館附属校平和教育実践展示とは＞

立命館の初等・中等教育段階での「平和・人権・地球市民教育」の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生・中学生・高校生の平和・人権・環境などの課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を知ってもらおうという企画です。ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の方々に、あらためて平和を考えていただける機会になればという思いで開催しています。

第90回ミニ企画展示

●ミュージアム・この1てん「アウシュヴィッツ解放70年特別展示」

会期：2015年1月10日(土)～1月31日(土)

主催：立命館大学国際平和ミュージアム



アウシュヴィッツで殺害された子どもの靴

第91回ミニ企画展示

●第20回ミュージアムロード参加企画

立命館大学×京都外国語大学学生企画「心の声—見て・感じて・考える—」

会期：2015年2月7日(土)～3月29日(日)

主催：立命館大学国際平和ミュージアム、京都外国語大学国際文化資料館

京都市内博物館施設連絡協議会、京都市教育委員会

協力：京都・大学ミュージアム連携



展示に向けて打ち合わせをする両大学の学生たち

第10回ボランティアガイド養成講座受講生募集(予定)

立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年に「世界初の大学立の平和博物館」として開設されて以来、今日までに100万人をこえる来館者を迎え、5,200校以上の小中高生の平和学習の場として活用されています。

当ミュージアムでは、全国の小学生から大人まで多様な来館者にあわせて、展示解説を中心に、展示物が語るエピソード・背景などを、ボランティアガイドの皆さんが、わかりやすく解説しています。「戦後70年」を迎えようとする来年、より多くの方にこのミュージアムを舞台に活動していただきたいと思っております。

そこでボランティアガイドとしてご活躍いただくために重要となる展示や歴史についての理解、ガイドとしての基礎知識を得ることを目的とした養成講座を開催いたします。

講座内容は、立命館大学国際平和ミュージアムを設立した趣意、「平和」の意義、展示に関する概要把握（一五年戦争・現代の戦争）、暴力と平和について、ガイドとしての接遇マナー、実習です。

ぜひ積極的にご参加ください。

開催日程(予定)：2/7(土)・2/14(土)・2/21(土)・2/28(日)・3/7(土)・3/8(日)

2/7(土)・2/14(土)は1日をかけて、他の日程は3～4時間(約半日)の講習を行います。

※2015年5月～7月は、養成講座修了生を対象に実地研修も行います。詳細は当ミュージアムホームページにてご確認ください。

●詳細はホームページでお知らせいたします。

第22巻第2号(通巻63号) 2014年12月5日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行

立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>